

非母語話者が古典日本語文法を学習する際の問題点

－現代日本語訳におけるミステイク分析から－

The problems when non-native learners learn classical Japanese grammar －Analyzing the mistake of translation from classical Japanese into modern Japanese－

春 口 淳 一

Abstract

In this paper, I analyze the mistake of non-native learners' translation from classical Japanese into modern Japanese to investigate a point to keep in mind in the guidance about the classical Japanese. As a result, the following characteristic became clear: (i) When the learner translate from classical Japanese into modern Japanese, they make a lot of mistake; (ii) The mistake can be classified into things about the classical Japanese, about the modern Japanese, and about politeness expression. And it can be classified in the plural lower items more each.; (iii) There are many mistakes about the auxiliary verb. It is because the recognition of an auxiliary verb being an object of the translation is insufficient; (iv) The learner is careful to only the understanding of classical Japanese. Therefore they often make rudimentary mistake of modern Japanese when they translate it into modern Japanese.; (v) The learner stops translation on the way. This is because he or she translates it in only the micro viewpoint.

1. はじめに

かつて筆者は中国の大学において日本語教育に従事してきたが、この間、古典日本語文法講義もまた受け持ってきた。なぜ日本語学習者が古典日本語文法、ひいては古典日本文学を学ばなければならないのか。これについては、中国の日本語教育において文学を重視する姿勢があること（宿・周 2007）と関係があるのかもしれない。

ともあれ、重点大学を始め、中国国内において古典日本語文法を扱う日本語教育機関は少なくない。本学の提携校においても吉林大学、厦門大学、首都師範大学、また台湾の淡江大学などで開講されている。また復旦大学（湯 1989）、北京第二外語学院（鈴木 1991）、華僑大学（関・岡崎 2003）のカリキュラムのうちにも含まれているとの報告もある。少なくとも中国の日本語教育の現場において、古典日本語文法は、珍しいものとは言えない。

1. 1 先行研究

しかしながら、これまで非母語話者向けの古典日本語文法教育を対象とした先行研究は少ない。立松（2000）、金山（2004）など授業報告として位置づけられるものに限られる。

このような状況を踏まえて、春口（2006）では実証研究の立場からアンケート調査を基にモチベーションを高めるための試みを取りまとめ、教師の自作による例文を多用して文法項目の定着に働きか

けることを提言した。そして自作例文の利点として、(1)未習項目を除くことができる、(2)十分な数を提供できる、(3)学習者の身近な話題を取り上げることでモチベーションを高めることができる、(4)社会文化など文法外の知識を欠くための制約を免れることができることを挙げている。

1. 2 研究目的

この研究は、まさに緒に就いたばかりであり、研究課題は多い。その中で、本稿は指導上の留意点を明らかにするため、学習者のミステイク

に着目する。具体的な研究課題として、次の3点を挙げる。

- ① 現代日本語訳を問うテストの中で、学習者の解答にはどのようなミステイクが現れるのか調べる。
- ② ミステイクに何らかの傾向が見られるか、ミステイクを分類することができるか、分析を試みる。
- ③ ①、②の結果を踏まえ、非母語話者へ古典日本語文法を教授する際に留意すべき事柄を整理する。

2. 調査概要

2. 1 調査対象

筆者が担当した古典日本語文法講義の受講生 39 人を対象に、中間テストを行った。受講生は中国 J 大学で日本語を専攻する 3 年生である。受講に先立ち、すでにほぼ全員が日本語能力試験 1 級に合格している。ただし、古典日本語文法に関しては、全員が初めての学習となる。

中間テストは全 16 回の講義のうち、第 11 回目に実施した。この時点での既習項目は以下の通りである。テストは、これらの理解の確認を目的として実施した。

- 歴史的仮名遣い
- 用言（動詞、形容詞、形容動詞）の活用
- 助動詞の活用、接続、意味

ず（打消） ごとし（比況） き（過去） けり（過去、詠嘆） つ（完了、強意）

ぬ（完了、強意） たり（完了、存続） り（完了、存続） す（使役、尊敬）

さす（使役、尊敬） しむ（使役、尊敬） る（受身、尊敬、可能、自発）

らる（受身、尊敬、可能、自発）、敬意表現を表す補助動詞（「たまふ」など）

む（推量、意思、勧誘、仮定、婉曲） むず（推量、意思、勧誘、仮定、婉曲）

らむ（未来推量） けむ（過去推量、過去の原因推量） らし（推定）

なり（推定） なり（断定） まし（反実仮想、ためらいの意志、推量）

じ（打消推量、打消し意志）

この時点では、古典日本語の助詞は講義していない。しかし、古典日本語によく見られる助詞の現れない例については、すでに多くの例文の中で繰り返し紹介し、解説をしている。

¹ エラーとは「その事柄に関して一貫して間違える場合」を、ミステイクとは「一過性の誤用」（迫田 2002）を指すが、本稿が学習者の誤用をミステイクとするのは、横断的研究であり、エラーとする根拠をデータから得られないためである。

2. 2 現代日本語訳

テスト形式は、古典日本語で記述した文章の現代日本語訳を問う問題 10 題とした。現代日本語訳を課したのは、現代日本語文法が広く「読む、書く、聞く、話す」に渡って活用できるのに対し、古典日本語文法に求められるのは原則として「読む」ことだけにあることを理由とする。つまり古典日本語文法学習の目標は、古典日本語文法を使って書かれた文章を読み、それを理解することにあるからである。

三枝 (1999) は、韓国語から日本語への翻訳を対象とする研究の中で「類似点が多いことが翻訳を直ちに容易にするわけではない」と述べている。むしろ、石井 (2007) などは、「通時的翻訳」の難しさに言及している。目標言語である古典日本語から第二言語である現代日本語への翻訳が求められる非母語話者にとって、負担は大きなものであろう。

中間テストでは前述の春口 (2006) を踏まえ、自作した古典日本語の例文、すなわち擬古文を対象とする現代日本語訳を課した。文中に用いられる古語については文法項目同様、すでに授業で扱ったものであり、未習項目はまったく含まない。しかし、授業内に用いた例文をそのまま問うのではなく、改めて作成したものである。

中間テストの問題とその解答例 (現代日本語訳例) を以下に紹介する。問題文中の固有名詞は仮名としたが、実際の問題では学習者にとって馴染み深く、また例文の内容にふさわしい人 (教師) の名前などを用いている。

問題 1. 古典文法、かたし。学生ども、復習せざりけむ。

【現代日本語訳】古典文法は難しい。どうして学生たちは復習しなかったのだろう。

問題 2. A先生、大学生なりたまひける時、アルバイトをよくしたまひけり。

【現代日本語訳】A先生は大学生でいらっしゃったとき、アルバイトをよくなさったそうだ。

問題 3. B先生、仏のごとき人なり。大声を出さるる姿を見し者はあらじ。

【現代日本語訳】B先生は仏のような人だ。大声を出される姿を見た者はいないだろう。

問題 4. 授業中に居眠りしたる学生ありけり。ゆゑにその者罪せられけり。

【現代日本語訳】授業中に居眠りしている学生がいた。だから、その学生は罰せられた。

問題 5. 雨強く降り。花散りなむ。

【現代日本語訳】雨が強く降っている。きっと花は散ってしまうだろう。

問題 6. 昨日食ひしマーラータン、味良かりき。C先生にも食はしめむ。

【現代日本語訳】昨日食べたマーラータンは味が良かった。C先生にも食べさせよう。

問題 7. 古、長春なるD大学に、日本人教師ありけり。名をEといひけり。

【現代日本語訳】昔、長春にあるD大学に日本人教師がいた。名前をEといったそうだ。

問題8. 教室より、子供の泣き声すなり。いとあやし。我見に行かむ。

【現代日本語訳】教室から子供の泣き声がするようだ。とても不思議だ。私は見に行こう。

問題9. 「汝、勉強せむ」と仰せられ、F先生、学生に宿題をせさせらる。

【現代日本語訳】「お前たち、勉強するのがいいよ」とおっしゃり、F先生は学生に宿題をさせなさる。

問題10. など古典文法をまねぶらむ。古典文法なかりせば、我が心はのどけからまし。

【現代日本語訳】どうして古典文法を勉強しているのだろう。古典文法がなければ、私の心は落ち着くだろうに。

3. ミステイクとその分類

「日本語の誤用」、すなわち日本語学習者による現代日本語における誤用について、吉川(1998)は次の分類基準を挙げている。①発音の誤り、②表記の誤り、③語彙の誤り、④文法の誤り、⑤表現の誤りの5種である。このうち、①発音の誤りはまず古典日本語には該当しない。②から⑤までの4つの基準を参考に、ミステイクの分類を行なった。

まずミステイクはその特徴から、「古典日本語のミステイク」、「現代日本語のミステイク」、「敬意表現のミステイク」に大別する。古典日本語のミステイク、現代日本語のミステイクはそれぞれ、ミステイクの原因に基づいて分類したものである。敬意表現のミステイクは、古典日本語と現代日本語の双方に起因するものであるが、それ自体まとまった数量が確認できるため、項目として別に取り挙げた。それぞれのミステイクは細分し、下位項目を設けている。例文を紹介するに当たっては、その項目に該当する問題文とミステイクを併記した。

3. 1 古典日本語のミステイク

古典日本語に関するミステイクは、古語(M-1～M-3、MはMistakeの意)と助動詞(M-4～M-8)とにまず二分する。ここで言う古語とは名詞、用言(動詞、形容詞、形容動詞)等を指す。古文単語として参考書(池田2000、鳥光2005)等で紹介されるものには、名詞や用言の他に副詞や連体詞等も含むが、講義で扱った品詞は名詞と用言のごく一部に限られる。

助動詞に関する項目が多いのは、テスト実施時まで中心となった講義内容が助動詞に重きを置いていたためである。古語については「欠落」「誤訳」「そのまま」を、助動詞にはこれに加えて「選択のミステイク」「添加」を挙げた。また古語の誤訳では古今異義語にも注目し、これを別途示した。

M-1 古語の欠落

例) 学生ども、→ 学生□□は、

問題文中に意味の分からない古語があった場合、それを無視して訳を進める。例文では「ども」は「～たち」と訳すか、あるいはマイナスの待遇的態度を帯びる(庵ほか2001)ことを踏まえた上

² 池田匠(2000)『新版完全征服読解古文単語260』桐原書店、鳥光宏(2005)『入試に出る古文単語が面白いほど記憶できる本 上・下』中経出版、など

でそのまま「～ども」を用いるなどすべきである。にもかかわらず、これを無視して訳を進めてしまっている。

M-2 古語の誤訳

例) ゆゑに → それに

古語を訳そうとするものの、その訳が誤っていることがある。例で挙げた「ゆゑに」は「だから」の意だが、ここでは「それに」と誤った訳をしている。

M-2' 古語（古今異義語）の誤訳

例) いとあやし → とてもあやしい。

また古語の誤訳には、古今異義語に関するものも確認できる。古今異義語とは、現代語と形が似ているが意味が異なる古語のことであり、訳出の際、特に誤訳の危険が高い。問題文の中では、例に挙げた「あやし」の他、「かたし」が該当する。

M-3 古語そのまま

例) 罪せられけり → 罪せられた

後続する受身の助動詞「らる」、過去の助動詞「けり」については問題ないものの、動詞「罪す」は現代日本語に訳すことなく表記している。「罪す」とは「罰を与える」の意であるが、これをそのまま用いては、古語と現代語の混同となり、訳文として不適切である。このように、古語をそのまま表記したことによるミステイクを「M-3」として分類した。

M-4 助動詞の欠落

例) 泣き声すなり → 泣き声とする□。

上記の例では、推定の助動詞「なり」を訳していない。正しくは「泣き声とするようだ」としなければならない。このように現代日本語訳をする中で、助動詞の存在を忘れる、あるいは意味を失念していて訳出を避けることがある。

M-5 助動詞の誤訳

例) 我見に行かむ → 私は見に行きたい。

テストの対象となる助動詞は前述の通り 22 項目に及び、助動詞によっては複数の意味から選択しなければならない。そのため、誤訳も少なくない。例では、「む」を意志「～しよう」で訳すべきところ、希望「～たい」としている。

M-6 助動詞の誤訳 選択のミステイク

例) 復習せざりけむ → 復習しなかつただろう。

複数の意味を持つ助動詞では、文脈等に応じてその中から適切な意味を選択しなければならない。例では不適切な意味を選択している。助動詞「けむ」には、過去推量「～ただろう」と過去の原因推量「どうして～なかつたのだろう」の 2 つの意味がある。ここでは過去の原因推量で訳さなけ

れば、前文とのつながりが不自然となる。

M-7 助動詞そのまま

例) 食はしめむ → 食はしめよう

古語にも同様のミステイクが見られたが、訳すべき必要のある語をそのまま表記することは助動詞を対象としても見られる。解答例を見てみると、助動詞「む」は意志「～しよう」と訳してはいるものの、使役の助動詞「しむ」は訳すことなくそのまま記載している。助動詞であることに気がつかない、あるいは助動詞の現代日本語訳が思い浮かばないためにそのまま記述したものである。当然現代日本語の文章としては、不適切な表現となっている。ちなみに解答例では古語「食ふ」も訳さずにそのまま記述している。

M-8 助動詞の添加

例) 古、長春なるD大学に… → 昔、長春にあったD大学に…

例としてあげた古文を忠実に訳せば、「昔、長春にあるD大学に…」となる。過去の助動詞「き」「けり」がないにもかかわらず、過去を添加していることになる。不必要に助動詞の意味を添加することによるミステイクとなる。

3.2 現代日本語のミステイク

現代日本語のミステイクは4つの下位項目を設けた。助詞については欠落(M-9)と添加(M-10)の2項目を、さらに表記(M-11)、表現(M-12)に関するミステイクを挙げている。

M-9 助詞の欠落

例) 古典文法いとかたし → 古典文法□□とても難しい

古文の特徴の一つに助詞の省略がある。しかし現代日本語では、書き言葉における助詞の省略は不適切な表現となる。例文では古文に引きずられて、現代日本語訳も格助詞を加えないまま記述している。

M-10 助詞の選択のミステイク

例) 古典文法なかりせば、我が心は… → 古典文法はなかったならば、私の心は…

また現代語に訳す過程において助詞を補うことは意識したものの、選択した助詞が不適當であることもある。例では従属節の中で「は」を使っているが、ここは「が」としなければならない。

³ 助動詞「けむ」は「などか」や「など」と共起した形で現れた場合、過去の原因推量として訳すが、これを伴わなくても、文脈より過去推量ではなく過去の原因推量と捉えなければならないケースもまた存在する。日本の大学入試センター試験に準拠してこれを扱ったが、非母語話者への講義内容として適当であったか、検討を要するだろう。

M-11 表記のミスタイク

例) したまひけり → していらっしゃたそうだ。

古語、古典文法の現代日本語訳は理解をしていても、濁点の付け忘れなど表記の段階でミスタイクをしてしまうこともある。例では「いらっしゃた」と書くべきところ、促音の「っ」を書き忘れて「いらっしゃた」と誤記を犯している。

M-12 表現に関するミスタイク

例) 学生ありけり → 学生があった。

例にある「あり」は存在を表し、「ある／いる」と訳す。後続の「けり」は過去を表す助動詞である。よって「ありけり」は、「あつた」または「いた」と訳することができる。主語が学生である以上、「あつた」では訳文として不適切である。

3. 3 敬意表現のミスタイク

ここでは、下位項目として3つのミスタイクを挙げた。古語、助動詞、助詞に関するミスタイクと同様に「欠落 (M-13)」「添加 (M-14)」の項目を設けた。また産出された現代日本語訳に見られた表現上のミスタイク (M-15) についても取り上げた。

M-13 敬意表現の欠落

例) アルバイトをよくしたまひけり → アルバイトをよくしたそうだ

例文中には尊敬を表す補助動詞「たまふ」が使われている。そのため、訳すのであればこれを反映させ、「よくなさったそうだ」などとしなければならない。

M-14 敬意表現の添加

例) 仏のごとき人なり → 仏のような人です。

「敬意表現の欠落」がある一方で、古文の中にその要素がないにもかかわらず、訳文に敬意表現を添加することもある。多くは例に挙げたような文末に「です」「ます」を加えてしまうことである。丁寧を表す補助動詞「候ふ」や「侍り」がない以上、「です」「ます」を加えては、正確な訳とはいえない。

M-15 (現代語における) 敬意表現のミスタイク

例) 大声を出さるる姿 → 大声を出せれる姿

例文中の「るる」は尊敬を表す助動詞「る」の連体形である。この点を意識していても記述した訳文が「出せれる」と、不適切な表現になってしまっている。敬意表現に関しては、このように訳出の必要性を意識していながら、訳す段階で適切な現代語が用いられない例が見られた。

4. 結果・考察

本章では設置した下位項目ごとに確認されたミスタイクを中心に現代日本語訳に見られた問題を明らかにする。またそれとともに、その特徴を分析し、その原因について考察を加える。考察に当たっ

では、学期終了時に行った授業アンケートも参考とした。

まず、下位項目に目を向ける前に、どの程度の割合で正しく答えることができたのか確認したい。表1に設問ごとの完全正答数とその比率を示した。完全正答は、語彙も文法も欠けることなく訳し、かつ記述した現代日本語が表記の上でも問題のないことを条件とする。

表1：完全正答

	正答者数	正答率		正答者数	正答率
問題 1	0 人	0.0 %	問題 6	4 人	10.3 %
問題 2	6 人	15.4 %	問題 7	15 人	38.5 %
問題 3	5 人	12.8 %	問題 8	0 人	0.0 %
問題 4	1 人	2.6 %	問題 9	2 人	5.1 %
問題 5	11 人	28.2 %	問題 10	4 人	10.3 %
			計	49 人	12.6 %

表1を見ると、全体でも12.6%と正答率は高くない。古文を現代語に訳すには、留意すべき問題点が多く含まれていることが窺える。また設問ごとの正答率に目を向けると、問題7は4割近くが正しく現代語に訳すことができたのに対し、問題1、問題8は0%と大きく異なる。

4. 1 訳出の放棄

前傾の表1で示した正答率に含まれないものが、すべてミステイクとは限らない。この中には訳出を放棄したもの、すなわち解答用紙に未記入のまま提出したものも含まれる。ミステイクの分類を行う前に、訳出の放棄がどの程度見られたのか示したい。

結果の提示(表2)にあたっては、句レベルでの放棄と文レベルでの放棄とに区分した。問題は10であっても、複数の文からなる問題もあることに注意されたい(合計すると、18の文となる。)Lで始まる番号は学生の通し番号を表し(L: learner)、個々の句レベル、文レベルの訳出放棄がどの程度見られたのかを示した(前述の、M-1「古語の欠落」、M-4「助動詞の欠落」、M-9「助詞の欠落」、M-13「敬意表現の欠落」などは、語彙レベルでの放棄であった可能性も否定できない。しかしながら本調査では、その裏づけまでは取れなかった)。

表2：訳出の放棄

	句	文		句	文		句	文		句	文
L1	0	1	L11	1	6	L21	0	0	L31	0	2
L2	1	0	L12	0	0	L22	2	1	L32	4	3
L3	1	1	L13	0	0	L23	0	0	L33	0	0
L4	0	0	L14	3	11	L24	1	4	L34	0	0
L5	0	0	L15	0	0	L25	0	10	L35	0	1
L6	0	1	L16	1	4	L26	2	2	L36	0	0
L7	0	0	L17	0	3	L27	0	0	L37	0	1
L8	0	1	L18	0	2	L28	1	9	L38	0	0
L9	0	0	L19	0	1	L29	0	0	L39	0	2
L10	1	7	L20	0	7	L30	0	1	計	18	81

表2より、句レベルと文レベルとでは圧倒的に文レベルでの放棄が目立つことがわかる。分からない語句があった場合、その箇所のみを放棄するよりも、文全体の訳出を諦める傾向が見られる。

また個人差も大きい。まったく放棄することなく訳出を試みた学生は15名であったが、一方で5つ以上の文の訳出を放棄した学生が6人いる。特にL14などは句レベルの放棄が3箇所、文レベルが11と非常に数が多い。極端な個人差もまた、放棄に関する特徴である。

4. 2 ミステイク

学習者ごとに、現代日本語訳に見られたミステイクの合計を表3に示す。最小で7箇所、最多で36箇所とここでも個人差が大きい。しかし最多のL21は訳出の放棄をまったくせず、一方で最小のL10、L25が文レベルでの訳出の放棄が特に大きかった学生であることを踏まえれば、一概に「ミステイクが少ない＝よく理解している」と評価することはできない。むしろ、総じて解答するだけの能力は十分身につけておらず、ミステイクの多少は解答に積極的であったか消極的であったか、その姿勢の違いに過ぎないとも言えるだろう。

表3：ミステイクの総数

	総数		総数		総数		総数		総数		総数
L1	22	L8	24	L15	15	L22	17	L29	13	L36	14
L2	7	L9	9	L16	18	L23	19	L30	14	L37	7
L3	17	L10	7	L17	21	L24	13	L31	10	L38	21
L4	12	L11	23	L18	30	L25	7	L32	11	L39	13
L5	14	L12	16	L19	22	L26	17	L33	24		
L6	13	L13	15	L20	17	L27	25	L34	11		
L7	14	L14	10	L21	36	L28	10	L35	8	計	616

4. 2. 1 古典日本語のミステイク

表4に古語に関するミステイク（M-1「古語の欠落」、M-2「古語の誤訳」、M-2'「古語（古今異義語）の誤訳」、M-3「古語そのまま」）の結果を、表5に助動詞に関するミステイク（M-4「助動詞の欠落」、M-5「助動詞の誤訳」、M-6「助動詞の誤訳 選択のミステイク」、M-7「助動詞そのまま」、M-8「助動詞の添加」）を、それぞれ分けて示した。

表4を見ると、まずM-1が14例と他に比べて少ないことが分かる。古語であることは意識しており、訳す上で欠かせない要素だと考えているのだろうか。このことはM-3が多いことから伺える。つまり、古語であると認知したものの該当する現代語が思いつかず、無視することもできないためにそのまま記述したのではないだろうか。

一方、誤訳に関するミステイクの多いことも特徴であろう。M-2とM-2'を足せば63例となり、積極的に訳出を試みたもののそれに失敗するケースの多いことが伺われる。また古今異義語が問題文で扱われたのは2語のみであるにもかかわらず、ミステイクが20例も確認できた点は重視すべきだろう。現代語との区別がまぎらわしい古今異義語は、現代語を身につけた日本語学習者にとっても間違えやすいのであろう。

一方、M-4、M-5が共に100例を越えていることから分かるように、助動詞に関するミステイク

表4：古典日本語のミステイク (M-1 ~ M-3)

	M1	M2	M2'	M3		M1	M2	M2'	M3		M1	M2	M2'	M3
L1	0	1	0	2	L14	0	1	1	1	L27	0	5	1	1
L2	0	1	0	0	L15	0	0	0	0	L28	0	1	0	0
L3	0	0	2	3	L16	0	1	0	0	L29	0	3	0	0
L4	0	0	1	0	L17	0	4	1	0	L30	3	2	0	1
L5	1	0	1	0	L18	0	1	0	3	L31	0	1	0	1
L6	0	1	1	0	L19	0	1	0	0	L32	0	2	0	2
L7	2	1	1	1	L20	0	0	0	2	L33	0	2	1	3
L8	0	1	1	2	L21	2	1	2	9	L34	0	3	0	1
L9	0	0	0	0	L22	1	4	1	0	L35	0	0	1	0
L10	1	1	0	1	L23	0	1	1	5	L36	1	1	0	0
L11	1	0	0	1	L24	0	1	1	0	L37	1	0	0	1
L12	0	2	1	2	L25	1	0	0	0	L38	0	0	0	1
L13	0	0	0	0	L26	0	0	1	1	L39	0	0	1	0
										計	14	43	20	44

は古語のそれと比べ格段に多い(表5)。すでに述べたが、この時点までの講義の中心が助動詞であり、出題者もこの理解を問うことを意図して問題文を作成したことが一因であろう。

表5：古典日本語のミステイク (M-4 ~ M-8)

	M4	M5	M6	M7	M8		M4	M5	M6	M7	M8		M4	M5	M6	M7	M8
L1	6	6	0	0	0	L14	4	0	1	0	0	L27	4	7	0	0	1
L2	3	0	0	0	0	L15	1	2	3	0	0	L28	0	5	0	0	0
L3	3	2	3	0	0	L16	5	4	0	0	0	L29	2	2	2	0	0
L4	2	6	0	0	0	L17	7	4	1	0	0	L30	2	2	0	0	0
L5	2	3	0	0	0	L18	3	1	1	1	1	L31	2	2	0	0	0
L6	1	4	0	0	1	L19	6	3	1	0	0	L32	1	3	0	0	0
L7	3	4	0	0	0	L20	3	6	1	0	0	L33	3	3	2	0	0
L8	3	5	1	0	2	L21	6	4	1	2	1	L34	0	0	1	0	1
L9	2	3	1	0	1	L22	3	2	2	0	0	L35	0	3	1	0	0
L10	1	0	0	0	1	L23	2	2	1	0	0	L36	1	1	1	0	1
L11	3	5	0	0	1	L24	2	0	0	0	0	L37	1	0	1	0	0
L12	3	0	3	0	0	L25	2	0	0	0	0	L38	2	5	2	0	3
L13	4	3	2	0	0	L26	3	1	1	1	1	L39	0	5	1	0	2
										計	101	108	34	4	17		

古語に関するミステイクとの大きな違いは、「欠落」と「そのまま」の多少にある。助動詞に関しては「欠落 (M-4)」が101例に達したのに対し、「そのまま (M-7)」は4例とその25分の1に過ぎない。古語が「欠落 (M-1)」14例、「そのまま (M-3)」44例であったのとは対照的な結果となった。M-1 ~ M-3で扱った古語が自立語であるのに対し、付属語である助動詞は通常動詞の語末に添えられるため認知されにくいのであろうか。これに関しては助動詞に活用があり、またそのパターンも助

動詞によってまちまちであることと関わってくるだろう。

また複数の助動詞が同時に用いられることもある。この場合、その存在はより希薄なものとなり、認識するのが難しくなるだろう。例えば、問題9の「せさせらる」はサ行変格活用の動詞「す」の未然形と、使役の助動詞「さす」の未然形と尊敬の助動詞「らる」の終止形からなる。古語と比べ、助動詞は正しく読解するのに煩雑なプロセスが要求される。一方の助動詞を訳すことで満足し、他方を見逃すことがないよう、注意を喚起しなければならない。

誤訳 (M-5、M-6) が多かった原因には、助動詞によっては複数の意味を持つものがあることが挙げられる。振り返って、これに該当する古語のミスエイクが少なかったのは、問題文に含まれる古語は基本的な語彙の代表的な意味を扱うに留まっていたため、複数の意味を持つ助動詞と比べて難度が低かったからだろう。

M-8の17例は、そのほとんどが過去の助動詞「き」「けり」が用いられていないにもかかわらず、現代日本語訳で文末を「～た」としたものである。時制を過去としても文レベルの訳では成立することがある。しかし前文とのつながりから、不都合となる。ミクロ的には誤りとならなくても、視野を広げれば不都合となる。テストはともかく、古典日本語文法の学習は古典文学の読解を究極の目標におくのである以上、時制への注意も怠ることはできない。

4. 2. 2 現代日本語のミスエイク

ここでは現代日本語に関するミスエイク (M-9「助詞の欠落」、M-10「助詞の選択のミスエイク」、M-11「表記のミスエイク」、M-12「表現に関するミスエイク」) を扱う。いずれも受講生本来の現代日本語能力からは予測しがたい初歩的な誤りである。

表6：現代日本語のミスエイク

	M9	M10	M11	M12		M9	M10	M11	M12		M9	M10	M11	M12
L1	4	0	1	1	L14	0	0	1	0	L27	0	1	1	0
L2	1	0	1	1	L15	1	1	4	1	L28	0	0	0	1
L3	0	3	0	0	L16	1	0	1	1	L29	0	2	1	0
L4	1	0	1	0	L17	1	0	1	0	L30	1	1	0	1
L5	0	3	2	1	L18	4	0	1	3	L31	0	0	2	0
L6	1	0	2	0	L19	2	0	3	0	L32	0	0	1	1
L7	0	0	0	0	L20	0	0	2	1	L33	3	1	0	3
L8	0	0	0	1	L21	0	0	0	5	L34	0	1	0	2
L9	0	2	0	0	L22	1	0	0	2	L35	1	0	2	0
L10	2	0	0	0	L23	1	0	3	1	L36	0	5	0	1
L11	2	0	2	0	L24	4	0	3	0	L37	0	0	1	0
L12	2	0	1	0	L25	0	1	0	1	L38	2	0	1	2
L13	0	0	2	0	L26	1	0	1	1	L39	0	1	0	2
										計	36	22	41	33

特に36例が確認できたM-9などは、この段階の学習者にはおよそ見られないミステイクである。問題文の理解に注意が向けられるあまり、産出への配慮が不十分となったのであろう。表記のミステイク(M-11)などは、まさにケアレスミスであり、見直しをしっかりとすることで防げるものである。

一方、M-10の中でも「は」と「が」の使い分けなどは、日本語作文としても誤りやすいものであり、しばしば見受けられる誤用の1つである。助詞の省略される古文を自然な現代日本語に訳す練習は、現代日本語の助詞を確認する機会にもなるのではないか。

M-12については、例に挙げた「ありけり」を「あった」とするミステイクが多くを占めた。これなどは複数の助動詞を用いた文の訳出と同じで、プロセスの途中で満足したために起こるミステイクだろう。ミクロ的な視点からマクロ的な視点への切り替えの重要性が伺えるミステイクである。

4. 2. 3 敬意表現のミステイク

M-13「敬意表現の欠落」、M-14「敬意表現の添加」、M-15「(現代語における)敬意表現のミステイク」に分類した敬意表現のミステイクの、調査結果を表7に示す。このテストの実施時点では、古典日本語の敬意表現は未だ本格的な学習の前段階であり、尊敬の助動詞「る、らる」と尊敬の補助動詞「たまふ」のみを扱っている。つまり、謙譲や丁寧を含めた中で選択することもなく、敬語動詞の訳出を検討する必要もない。該当する問題文は問題2、3、9の3問である。

表7：敬意表現のミステイク

	M13	M14	M15		M13	M14	M15		M13	M14	M15	
L1	1	0	0	L14	1	0	0	L27	2	1	1	
L2	0	0	0	L15	1	0	1	L28	0	2	1	
L3	1	0	0	L16	2	2	1	L29	0	0	1	
L4	0	1	0	L17	1	0	1	L30	0	0	1	
L5	1	0	0	L18	1	9	1	L31	2	0	0	
L6	0	0	2	L19	2	4	0	L32	0	1	0	
L7	2	0	0	L20	2	0	0	L33	3	0	0	
L8	0	6	2	L21	2	1	0	L34	1	0	1	
L9	0	0	0	L22	1	0	0	L35	0	0	0	
L10	0	0	0	L23	2	0	0	L36	0	1	1	
L11	1	6	1	L24	2	0	0	L37	0	0	2	
L12	2	0	0	L25	2	0	0	L38	2	1	0	
L13	2	2	0	L26	2	2	1	L39	1	0	0	
									計	42	39	18

M-13については敬意表現と知って回避したケース、補助動詞「たまふ」などを見落としのために訳出しなかったケースなどがある。前者については、敬意表現の知識を現代日本語からしっかりと定着させ、苦手意識を緩和させることから取り組む必要がある。一方、後者であれば他のミステイク同様に、訳出後の見直しなど注意を喚起したい。

M-14は、L8、9、18に集中しており、一般的なミステイクとは言い難い。教師が目にすることを意識した、あるいは普段「です／ます体」を好んで使うなどが原因だろう。「丁寧」の敬語表現の導入

後には、要不要の判断がより明確なものとなり減少することが期待できる。

M-15は現代日本語の敬意表現を正しく習得していないことが最大の原因だろう。数は多くはないが、これは問題数が少ないことと訳出の放棄が多かったためである。

またM-14と異なり、本格的な敬意表現の導入によって訳語の選択肢が増えると、M-13、M-15は増加することが予想される。二重敬語や二方面、三方面へ向けた敬語、自敬表現、絶対敬語など、古典日本語文法における敬意表現は、非常に煩雑である。なお一層、現代日本語における敬意表現の整理が求められるだろう。

5. おわりに

5. 1 結論にかえて

結果と考察から、日本語学習者による古典日本語からの現代日本語に訳した際のミステイクの特徴をまとめる。これはまた本稿の研究課題として挙げた、指導上の留意点として捉えなければならないだろう。

- 学習者は、古典日本語を現代日本語に訳すに際して、数多くのミステイクを犯す。
- ミステイクは、古典日本語に関するもの、現代日本語に関するもの、敬意表現に関するものに大別でき、さらにそれぞれ複数の下位項目に分類できる。
- 助動詞に関するミステイクが、非常に多い。その一因として、助動詞が訳出の対象であることへの認識が不十分であることが挙げられる。
- 古文の理解に注意が偏り、産出で初歩的なミステイクを犯しがちとなる。
- 専らミクロ的な視点で翻訳するために、中途であるにもかかわらず訳出を終えてしまう。

これらミステイクを概観した時、現代日本語能力が古典日本語の学習に密接に関わっていることが明確である。十分な古典日本語の理解、そしてもちろん現代語訳には、まず現代日本語能力の養成が欠かせない。視点を変えれば、このような活動は現代日本語の確認、定着に一役買うことが期待できるのではないだろうか。

5. 2 今後の課題

今回の調査で懸念されるのは、ごく初歩的な現代日本語のミステイクが散見されたことである。古典日本語学習が現代日本語能力に干渉し、これを低下させることはないだろうか。本稿ではミステイクとしたこれらの誤用をエラーと捉え直すべきか、追跡調査が求められる。

日本語学習者として最優先すべき現代日本語に、古典日本語学習はどのような影響があるのだろうか。この点を解明するには、「作文」「会話」など現代日本語を対象とする科目に及ぶ調査を縦断的に行なう必要がある。

また当然のことながらミステイクには個人差が見られた。このことが個々人の現代日本語能力と、また古典日本語（古典文法）学習へのモチベーションの有無（高低）とどの程度関係があるのか、調査したい。

一方、調査方法の改善も検討すべき課題である。本稿では学習者のテスト解答用紙を一次資料に、授業アンケートを補足資料として分析・考察を行なったが、十分な客観性を持つとは言えない。研究の今後の展望を図る上で、フォローアップ・インタビュー（ネウストプニー 1994）を採用するなど改

善を心がけたい。

また個人差が顕著に表れた訳出の放棄だが、このような消極的な参加態度を改善するための取り組みの必要性も痛感したところである。前掲、春口（2006）に留まらない、モチベーション向上のための教授法を模索することが欠かせない。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 池田匠（2000）『新版完全征服読解古文単語 260』桐原書店
- 石井慎一郎（2007）「翻訳とは何か ー原点と翻訳の関係」『外国語教育論集』29、筑波大学外国語センター、117-125 頁
- 金山泰子（2004）「上級学習者のための文語文法入門」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』27、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、41-62 頁
- 間英・岡崎智己（2003）「華僑大学における日本語教育 ー中国における学部生日本語教育課程を考えるー」『九州大学留学生センター紀要』13、1-10 頁
- 三枝壽勝（1999）「韓国語からの翻訳」『日本語学』18-3、明治書院、14-24 頁
- 迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 宿久高・周異夫（2007）「日本語教育の中の文学と文化 ー中国における日本語教育の現状と課題ー」『日本語教育』133、日本語教育学会、28-32 頁
- 鈴井宣行（1991）「北京第二外国語学院における実践的外国語教育 ー日本語学科の学習指導を通してー」『創価大学別科紀要』5、創価大学、23-51 頁
- 立松喜久子（2000）「文語文法を教える 外国人上級者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、1-24 頁
- 湯麗敏（1989）「中国復旦大学国際政治学部における日本語の教育」『創価大学別科紀要』4、創価大学、72-77 頁
- 鳥光宏（2005）『入試に出る古文単語が面白いほど記憶できる本 上・下』中経出版
- ネウストプニー、J.V.（1994）「日本研究の方法論 ーデータ収集の段階」『待兼山論叢』28、大阪大学文学部、1-24 頁
- 春口淳一（2006）「非母語話者を対象とした古典文法授業の実践報告 ー学習者のモチベーション向上を目指した取り組みー」『中国日语教育理论写实践研究』吉林大学出版、56-66 頁
- 吉川武時（1997）「誤用分析 I」『日本語誤用分析』明治書院、2-54 頁